

(別紙)

不順天候における農作物の栽培管理（梅雨明け後の対応）について

令和2年8月4日
農業技術課

※農薬に関する情報は、令和2年8月1日現在の農薬登録情報に基づき記載しました。
農薬を使用する際は、農薬ラベルをよく確認し、使用基準を遵守してください。また、長野県、(一社)長野県植物防疫協会発行の「長野県令和2年農作物病虫害雑草防除基準」を参考としてください。

1 作物

(1) 水稻

ア 一般管理

出穂後の高温により、胴割粒（出穂後10日間に30℃以上の最高気温）、白未熟粒（出穂後20日間の25℃以上の平均気温、23℃以上の最低気温）が助長されるため下記に留意した管理を行う。

(ア) 追肥

今後、追肥適期となる移植時期が遅い地域では、生育量に応じた追肥を行う。

(イ) 水管理

減水深が1cm/日以下など保水性が高いほ場では、夕方に水を入れ替え水温の低下を促す。

出穂前後20日間の常時湛水や出穂後20日間のかけ流し灌漑を行う。

長雨により中干しが不十分であった場合も、適期まで落水期を前倒しはしない。落水後も土壌が乾燥した場合には走水灌漑を行う。

イ 防除

病虫害発生注意情報として、7月13日に第3号（斑点米の原因となるカメムシ類）、7月22日に第4号（イネいもち病）が発表された。このため、下記に留意した防除を行う。

(ア) いもち病

出穂前20日頃には、ピロキロン剤、プロベナゾール剤などを散布する。

出穂前15日頃は、トルプロカルブ粒剤（3%）を散布する。

穂はらみ期と出穂期は、トリシクラゾール剤などを散布する。

無人航空機での散布では、出穂期にトリシクラゾール剤などを散布する。

(イ) 紋枯病

病勢進展初期～出穂期に、バリダマイシン剤、フルトラニル剤などを散布する。

(ウ) 斑点米の原因となるカメムシ類

出穂期2週間前から糊熟期頃までは畦畔除草を避ける。

出穂期にエチプロール粒剤を散布する。

出穂7日後にジノテフラン粒剤、クロチアニジン粒剤を散布する。

出穂10日後に、MEP乳剤、BPMC・MEP乳剤を散布する。

無人航空機での散布の場合には、エチプロール剤、ジノテフラン剤を散布する。

ウ 収穫準備

高温により収穫適期の前進が見込まれるので、最新の収穫適期情報を随時、確認して、収穫機（コンバイン等）、乾燥調製施設の準備を進める。

(2) 大豆・そば

ア 排水

長雨により土壌水分が高いほ場では、排水口の整備、明渠と排水口の接続により乾燥を促す。

イ 大豆の防除

- (ア) 大豆の紫斑病防除適期は、開花後2週間から4週間頃である。降雨が続くと発生が多くなるので、天候に留意するとともに、着莢部位に十分薬剤が到達するように散布する。アゾキシストロビン水和剤を散布する。
- (イ) マメシクイガの防除は、クロラントラニリプロール水和剤などを散布する。
無人航空機での散布ではエトフェンプロックスマイクロカプセル剤を散布する。
- (ウ) カメムシ類の防除は、エトフェンプロックス乳剤、ジノテフラン顆粒水和剤、ダイアジノン粒剤を散布する。
無人航空機での散布ではシラフルオフェン乳剤を散布する。

2 果樹

(1) 共通

ア 一般管理

- (ア) 品目を問わず、糖度がやや低めで着色が遅れぎみだが、果実成熟はやや早めの傾向にある。
- (イ) 受光態勢改善のため、支柱立て、枝つり、徒長枝切り等を行う。

(2) りんご

ア 一般管理

- (ア) 梅雨明け後に高温や強い日射に遭遇すると、日焼け果が発生する可能性がある。日焼け果の発生を軽減するために早生品種などでは、寒冷紗などの遮光資材を被覆する。
- (イ) 徒長枝整理や支柱たて、枝つりを行って通風をよくし、薬剤がよくかかりやすいよう心がける。

イ 防除

- (ア) 黒星病、褐斑病、炭疽病の発生が一部でみられている。8月～9月上旬は、有機銅剤、イミノクダジン酢酸塩液剤、キャプタン剤加用QoI剤（ストロビルリン系薬剤）を散布する。防除間隔を開けすぎず、散布ムラのないように防除する。
- (イ) ハダニ類は、園地によって7月下旬から増加している。発生が多い場合は、本年度は未使用の効果の高い殺ダニ剤を散布する。

(3) もも

ア 一般管理

- (ア) 着色は遅れているが果肉成熟は進んでおり、収穫前落果が見られる。着色向上のため、必要な場合は反射シートを敷設する。
- (イ) 果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。

イ 防除

- (ア) 灰星病の発生がみられているため、DMI剤、ジカルボキシイミド系剤、などを予防的に散布する。
- (イ) せん孔細菌病は、落葉して間もない落葉痕に感染しやすいため、台風が襲来すると風雨により落葉と感染が同時に起こり、多発しやすい。このため、icボルドー412などで防除する場合は、台風襲来前に実施することが望ましい。なお、効果を高めるためには、9月中旬とその2週間後の2回散布する。

(4) なし

ア 一般管理

- (ア) 「幸水」は、外観と熟度はやや進んでいるが、糖度がやや低めの傾向である。
- (イ) これから収穫を迎える品種は、熟度の進行に十分留意し、収穫が遅れないようにする。

イ 防除

- (ア) カメムシ類の発生はいったん収まっている傾向にあるが、今後の天候によっては発生が心配されるため、発生状況を的確につかみ、必要な場合はネオニコチノイド剤や合成ピレスロイド剤を散布する。

(5) ぶどう

ア 一般管理

- (ア) 果粒肥大は良好であるが、糖度、着色、成熟は遅れている。
- (イ) 副梢等の発生が多く、棚面が暗い園が多いので、摘心等新梢管理を徹底する。
- (ウ) ナガノパープルを中心に裂果の発生が多い。果実袋が裂果により汚れている場合は、裂果粒を取り除く。
- (エ) 収穫は、品種ごとに成熟の状況を確認して適切に行う。
- (オ) 荷造り時には、病害虫果や障害果（裂果など）の除去に注意する。

イ 防除

べと病の防除に9月上中旬までボルドー液等を散布する。

(6) 日本すもも・プルーン

ア 一般管理

- (ア) 雨よけ施設がない場合は、裂果の発生が多い。
- (イ) 成熟はバラツキが見られる。
- (ウ) 果肉の成熟を確認しながら、収穫遅れとならないように適期収穫に努める。

イ 防除

- (ア) 灰星病等の発生が多いので、防除を徹底する
- (イ) 雨よけ施設でハダニの発生が多いので、防除を徹底する。

3 野菜

(1) レタス類

ア 一般管理

梅雨明け後の高温などにより、軟腐病、腐敗病などの細菌性病害が発生している。今後、にわか雨（夕立）等により被害の拡大が心配されるので、生育ステージに応じて予防防除を徹底する。

イ 防除

- (ア) 細菌性病害は、生育ステージに応じて銅剤、オキシリニック酸剤及びその混合剤、抗生物質剤等のいずれかを使用基準に沿って散布する。なお、銅剤及び抗生物質剤等の高温時の散布は薬害が発生するので注意する。
- (イ) チップバーンの発生増加も心配されるので、カルシウム剤の葉面散布を行う。

(2) はくさい

ア 一般管理

黒斑細菌病などの病害が発生しており、今後、にわか雨（夕立）等により被害の拡大が心配されるので、生育ステージに応じて予防防除を徹底する。

イ 防除

細菌性病害は、生育ステージに応じて銅剤、オキシリニック酸剤及び抗生物質剤とその混合剤等のいずれかを使用基準に沿って散布する。なお、銅剤及び抗生物質剤等の高温時の散布は薬害が発生するので注意する。また、結球期の散布及び連続散布は特に留意する。

(3) キャベツ

ア 一般管理

黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病の細菌性病害や、株腐病等の発生が増加する。今後、にわか雨（夕立）等により、さらに被害の拡大が心配されるので、生育ステージに応じて予防防除を徹底する。

イ 防除

細菌性病害は、生育ステージに応じて銅剤、オキシリニック酸剤及び抗生物質剤とその混合剤等のいずれかを使用基準に沿って散布する。なお、銅剤及び抗生物質剤等の高温時の散布は薬害が発生するので注意する。また、結球期の散布及び連続散布は特に留意する。

(4) アスパラガス

ア 一般管理

露地栽培では茎枯病等の発生が増加する。今後、にわか雨（夕立）等により罹病株から病気が拡大するので、できるだけ罹病している茎の抜き取りを行うとともに、防除を徹底する。

(5) ジュース用トマト

ア 一般管理

梅雨明け後の高温により、日焼け果の発生が心配されるので、わら掛け等で果実をできるだけ被覆する。また、品質低下（規定養分不足）を招かないよう熟期を見極めて適期収穫に努める。

(6) きゅうり

ア 一般管理

梅雨の長雨等により、褐斑病、炭疽病等の病害の発生が拡大している。特に露地栽培では、今後、にわか雨（夕立）等により被害の拡大が心配されるので、防除を徹底する。

イ 防除

褐斑病及び炭疽病などは防除基準に沿って、使用基準を順守し防除する。なお、同一系統内の薬剤を連用すると、耐性菌を生じる恐れがあるので避ける。

(7) その他

ア 一般管理

害虫では、ハダニやアザミウマ類、コナガなどのチョウ目害虫の発生が増加するため、早期発見と初発防除を徹底する。

4 花き

(1) きく

ア 一般管理

高温の影響により開花期が前後したり、貫生花の発生につながるため、施設栽培では気温の上昇を抑えるため十分な換気を行う。また、土壌の乾燥により生育が遅延したり、短茎開花となるため、適宜かん水を行う。

イ 防除

(ア) 白さび病、斑点細菌病などの発生が懸念されるため、ローテーション防除による予防防除の徹底を図る。なお、品質低下となる薬剤の汚れの発生には注意する。

(イ) キク白さび病には、DMI 剤などを散布する。

(ウ) キク斑点細菌病には、オキシリニック酸剤などを散布する。

(2) カーネーション

高温により茎の軟弱化、花卉の変色・傷み等切り花品質が低下するため、ハウスの通風を良くするとともに、日中の高温時間帯に 30% 程度の遮光資材の被覆を行う。

(3) トルコギキョウ

高温により早期抽だいとなったり、葉先焼け（チップバーン）の発生が助長されるため、ハウスの通風を良くするとともに日中に遮光を行い、気温・地温の低下に努める。抽だい後の乾燥は切り花品質および日持ち性を低下させるため、乾きすぎる場合はかん水を行う。

(4) アルストロメリア

高温と強日射により葉焼け、花焼けが発生するため、ハウスの換気と遮光を徹底する。また、高地温によりシュート数が減少するとともに、花芽形成率が低下し、秋冬期の収量が減少するため、地中冷却設備のあるほ場では、地温 20℃ 以下を目標に十分な地冷を行う。

(5) 露地品目

土壌乾燥による生育遅延、短茎開花、葉焼け・花焼け等の品質低下が懸念されるため、かん水

を十分に行うとともに、敷きわらにより水分確保と地温上昇抑制を図る。

5 飼料作物

ア 一般管理

- (ア) 降雨による収穫作業遅れ等により、収穫適期を過ぎた牧草・稲ホールクroppサイレージは消化性の低下等飼料としての品質が低下しているため、乳牛の乾乳末期や泌乳初期等影響が出やすい時期の牛には給与量を控えたり、代替の粗飼料を給与するなど、特に注意する。
また、刈倒し後、降雨に当たり長期間収集できず変敗したものは、給与を控える。
- (イ) やむを得ず高水分で調製する場合は、必要に応じてサイレージ添加剤等を利用する。
- (ウ) 飼料用トウモロコシで、日照不足による生育遅延が心配される場合は、雌穂の熟期を確認して収穫する。